

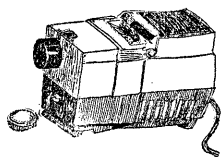
日本植調研究所(試験場・研究所めぐり117)

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	中山, 治彦
巻/号	31巻9号
掲載ページ	p. 416-417
発行年月	1976年9月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



日本植調研究所の巻



(試験場・研究所めぐり 117)

譲二が牛久の研究所を訪れたのは6月の半ばであった。旅なれぬ彼にとって、初めての常盤線は多少億劫であったが、あらかじめ電話で取手から三つ目、時間で上野から約1時間と聞いていたので、乗り過ごすこともなからうと考えていた。けれども、1時間に1本の鈍行でないと牛久駅はとまらないとも聞かされていたので、上野駅で乗り遅れたら厄介だ、という心配はなんとなく気を重くさせていた。帰りに降られたらという心配で、持ちつけぬ傘の持参も面倒にさえ思えた。

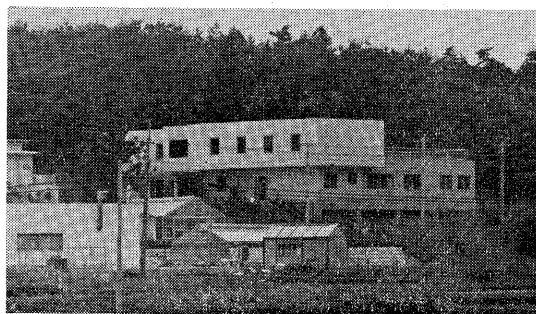
譲二はこの日、ブラリと家を出たが、彼の家族のものは「また構想ですか」といって、含みのある笑いをした。彼が事ある毎にこの構想という言葉を持ち出すので、始めは無反応であった家族も、時がたつにつれて茶化すようにさえていた。時には明らかな居眠りにも、譲二があわてて構想中だった、と答えてしまったことがあったからである。

譲二はこの日の訪問先はあまり詳しくなかった。同僚や先輩が少しばかり入れ知恵してくれたので、およそのことは掴んでいる心算であったが、牛久駅から乗ったタクシーの中では、なんとなく落ち着かない状態であった。知人が誰もいない、見たところもない所を走っている、この不安が次第に大きくなっているのに気付いた。気安めといえ、タクシーの運転手が行先の植調研をよく知っていたことぐらいであった。

3キロ程走ってから、レンガ造りの綺麗な門が譲二の目に入った。門の赤と、伊吹の緑と、ところどころに置かれたフェンスの白は見事なコントラストを作っていた。門には銅板がはめ込んであったが、彼は車の中から読みとることが出来なかった。彼は後で、それが財団法人日本植物調節剤研究協会研究所という馬鹿長い門札だったことを聞かされた。彼が車から降りて、正面の本館らしい建物や、立ち並んだ大小の硝子室を見渡した時、研究所の規模が思ったより大きいのに驚いた。気乗りしなかった心の準備を彼は秘かに恥じた。彼は、鴻巣にあった頃のこの研究所の前身が薄汚い物置小屋だった、と聞かされていたが、それが目の前の建物は小さい地域農試の半分くらいもあったのである。

× × × ×

譲二は来意を告げてから、応接室でこの管理者と話すことになったが、何から尋ねてよいか迷っていた。卒直に今の気持を伝えるのがよいと思った彼は、「なかなかいい建物ですね」と言ってしまった。けれどもすぐ後で、『いいところですね』というべきだった、とも考えた。主客の面識程度からみて、建物より環境を持ち出すべきだったと考えたが、少し遅すぎた。譲二は、中庭の向うの、小綬鶏のかん高い啼き声をききながら、案の上ここは静かな良い環境であることを聞かされてしまった。時折、この中庭で野兎をみかけることもあるそうである。また、キンラン、エビネの類もまだ荒されずにあるとか。建物については、安普請ではあるが、大きさは手頃だそうで、大きさの割合には研究員がチョッと少ない目、ということだった。譲二は貰ったパンフレットの、本館180坪、別館80坪、研究員10



名という数字に目をやりながら、概況を聞いていた。

× × × ×

譲二は質問の筋を考え、ここでどんな研究をしているかを尋ねた。大きな構えをもち、整備された研究室を備え、有能な研究者をかかえている、と考えた彼は、ここでの研究内容に少なからぬ関心をもつことになった。けれども管理者の説明は、名前は研究所でも、今のところは委託試験が主体で、それも所定の内容なので検査所の

* 日植調協会の常務理事で、皆んなから“常務”と呼ばれている吉沢長人さんである。研究所は協会の下部機関なので、吉沢さんの意見が優先だそうである。

** 研究所の全景に近い状態、左側には別館があるが、全部はこの中に入らなかった。開所式の時、祝詞に大臣、知事と出たので、地元はびっくりしたとか。

方がわかりやすい、ということだった。譲二の質問は短兵急であったが、管理者の答はおだやかで、恰もそれをそらすようでもあった。

譲二が聞いた説明は、委託試験には作用性と適用性がある、例えば水田用除草剤の場合の作用性は、ポット試験を通じて薬量、施用時期、効果、葉害、それに土中の移動、残効などが検討され、どちらかといえば使用基準に関連した要因解析で、適用性は圃場での実際的な試験ということであった。その他、非農耕地、芝などに対する除草剤の検討、あるいは農林省からの委託試験で、除草剤の作用機作や安全使用法の確立についての試験もおこなわれている、と聞いた時、譲二はこの研究所の仕事の範囲の広さに驚かされる羽目になった。「随分いろいろのことをしているのですね」という譲二の相槌に、ここの管理者は「ここの人は兎に角よく働く」と言っ



て、大きく頷いてみせていた。この日譲二は、最も関心をもった基礎研究の内容は聞き出せなかったが、それは自分自身の未熟からきたかも知れない、と思った。

譲二はまた、近辺の人々との調和をつくり出すために、新しい研究所としての苦労話も聞かされた。譲二は、自分が長い歴史の温もりの中で、不足なく育てている幸せを改めて認識することになった。

話は日本の除草剤の現状にも及んだが、薬の名前が多

* 畑は約50 a、この外、非農耕地、芝生での試験も実施されている。野菜、果樹はやらないのですか、という質問もあるそうである。

** 水田は約1 ha、最近ようやく近所のオパサン方が数多く手伝いに来てくれるようになったとか。ポツポツ農家の見学者も増えて、名実ともにというところだそうである。

すぎて何が何やらわからなくなってしまった。譲二が理解出来たのは除草剤の売れ行きが増えて、近期中に農薬の中ではトップを切るだろうということだけだった。

× × × ×

譲二は彼の先輩から頼まれていた質問のきっかけを考えていた。その質問は、一城の“あるじ”だから、“あるじ”としての感想を訊いてこい、というものだったが、なかなかこの質問は出しにくかった。譲二はおそるおそる訊いてみた。

譲二はここで意外なことを聞かされる羽目になった。それは“あるじ”としての感想よりも、あるじとしての心構えのようなものであったからである。譲二は、まだ自分が若いのでこんなことになったか、と考えた。それは人事管理についての話で、その真髄はそれぞれの人の隠れた能力を見出して、それを企業、または研究のために如何に培うか、ということで、それには自発的興味を如何にもたせるかも大事だ、という話だった。叱咤する、ケチをつける、悪評する、こんなことは誰にでも出来る、とも聞かされた。年数さえ経てば役職につけると思っていた譲二にとって、こんな当り前の話が、意外に彼の心をとらえた。

譲二はまた、この研究所が自分達の稼ぎで生活し、研究所を維持している話も聞かされた。大量の委託試験をこなしながら、仕事を完遂するのは生やさしいことではないそうである。譲二の専門は、この研究所でやっていることとは違い過ぎていたので、このような話の意味は解し得なかったが、これが民間の研究所の共通的なことだからかも知れない、と考えた。この管理者は2年前にここに来たそうである。譲二は“あるじ”としての感想は聞けなかったが、あの頭髪が何かを物語っているのでは——と、勝手に考えた。譲二は3年前頃、この人とどこかで会ったが、その時はこんなに白髪がなかった筈だ、と考えていた。

正午近くになった頃、譲二は誘われるまま、昼食に出掛けた。近くの欧風レストラン“シャトー”で、そのブドウ園が日本で始めてボルドー液の試験をしたところ、という話を聞かされた。100年近くの歴史があるそうである。ブドウ園と、醸造所と、ブドウ、このセットが“シャトー”だということや、日本のブドウ酒はアルコール濃度が少し高過ぎて、酔っぱらい向きに出来ているとか、酸味が口に残るのは、日本では売れ行きが思うようにいかないからだ、という話も聞かされた。譲二には全てが耳新しい話であった。

譲二のこの日の僅かなほろ酔いは、出掛ける時の億劫さを発散させるに充分だった。 (中山治彦)